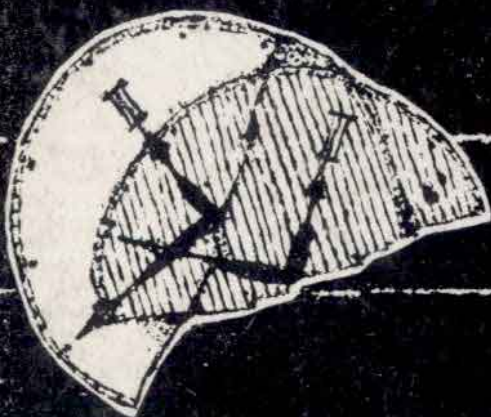


役員室午後三時

城山三郎



新潮文庫

やく いん しつ ご ご さん し
役員室午後三時

新潮文庫

し - 7 - 2



昭和五十年一月三十日 発行
昭和六十一年七月三十日 二十七刷

著 者 城 山 三 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示しております。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Saburô Shiroyama 1971 Printed in Japan

ISBN4-10-113302-6 C0193

新 潮 文 庫

役 員 室 午 後 三 時

城 山 三 郎 著

新 潮 社 版

2232

役員室午後三時

第一章

ベンツは、並木道の緑を押し分けて走った。

両側には、樹齡八十年の銀杏いちようの並木が続いている。このため、幅五メートルほどの道は、木蔭というより、緑の水路の感じがあった。走っていると、青い水音が聞えてきそうであった。秋にはこれが黄金色に光る道になる。

助手席に居た企画室長の矢吹が、ルーム・ミラーで藤堂を見て言った。

「ずいぶんりっぱな並木道になりましたね」

「八十年も経つと、木にも風格が出てくるね」

社長の藤堂は、鷹揚おうちようにうなずいた。

風格のついたのは、もちろん、木だけではない。企業にも、企業者にも、にじみ出てくる。華王紡績は、日本最古の、そして最大の紡績会社であった。

戦前には、満州、中国はじめ海外各地に積極的に進出。生産の七割が外地工場といわれるほどであったが、それでも、内地に在る工場だけでも、二十八。一生の中に、全部の国内工場を見たことのない重役も居る始末であった。最盛期の従業員数、十四万二千。

それだけの企業である。企業にも、企業者にも、色濃い風格があって、当然であった。

ベンツの中に居る藤堂社長には、生れながらの王者の風格があった。

厚く広い胸をした堂々たる恰幅、やさしいが重厚な風貌、落着きのある挙措。各国の元首の中でも、藤堂ほどの風格のある人は少ない。

王者は、ベンツの中で、ふっと幼い日のことを思い出した。

あれは、藤堂が四歳か五歳のころだったろうか。

何かのきっかけから、当時、社長をしていた父の藤堂幸有を、この工場に訪ねた。風のある、秋の日のことであった。帰りは、父のフォードで送ってもらったのだが、その車の前へ、そして屋根へ、音を立てて、銀杏の実が落ちた。

折から退勤時で、近くの寮や社宅から出てきた家族たちといっしょに、従業員たちが風に巻かれながら、実を拾っていた。生物でも追っているように、たのしそうであった。

藤堂は、自分も拾ってみたくなった。

フォードをとめさせ、路面に下りた。四つ五つ拾い、手の中に持ちきれなくなり、かぶっていた帽子を脱いで、その中へ入れた。

そのとき藤堂は、誰かに見られている気がして、顔を上げた。

従業員やその家族たちが、拾うのをやめ、遠巻きに藤堂を見つめていた。

「社長のお坊ちゃまだ」

ささやき声が聞えた次の瞬間にその人々が路面に崩れると、あっけにとられている藤堂の帽子の中へ、何人もの手が銀杏を注ぎこみ、たちまち帽子に溢れた。

藤堂としては、有難くなかった。藤堂がしたいのは、銀杏を拾い集めるという作業であり、銀杏そのものが欲しいのではなかった。路面にぶちまけて、はじめから拾い直したかった。顔をしかめたいところだが、藤堂は逆に笑顔になり、ぴよこんと軽く頭を下げた。

社長の令息ぶらず、いかにも子供らしいと、従業員たちはほっとした様子であったが、実際は、子供らしくない仕種しぐさであった。

藤堂は、父の幸有に食事のときなど、くり返し言い聞かされていた。

「従業員は家族だ。うちには、一万人の家族が居ると思うのだ」

などと。邸やしきの女中たちにも、用をたのんだ後、必ず「ありがとう」と言わされた。

それは、幸有の主義であり、躰しづけであり、幸有なりの帝王学でもあった。このため藤堂は、いつも従業員という「家族」を意識する子供らしくない子供であった。

幸有がどこまでヒューマニストであり、どこまで経営者としてリアリストであったかは、わからない。

紡績は何より人手をくう産業である。日本の紡績は、安く豊かな女子労働力を徹底的に酷使することで発展してきた。

大正半ば、幸有は日本の進歩的な資本家代表として、第一回の国際労働会議に出席した。その席上、各国代表から、日本で行われている夜の十時から朝の五時までの女子の深夜労働を禁止せよという要求を突きつけられて、幸有は狼狽ろうばいする。

当時、日本に三百万鍾すいの紡績設備があったが、女子の深夜業を禁止されると、百万鍾の生産を

とめられたのと同じ結果になる。損害はこれこれだと、数字を上げて、けんめいに防戦した。幸有にとって、「二万人の家族」に深夜労働をやめられては、一大事であったのである――。

ベントは、緑の水路を掻き分けて進んだ。水路の彼方に、工場の赤煉瓦が見えてくる。

銀杏は、仕事への往復がたのしい道になるようにと、父の幸有が植えさせたものであった。幸有の意向通り、これまでも、そして、これから、どれほど多くの人が、この道をたのしんで歩くことであろうか。

男の残すのは、つまり、こういうものでなくてはならぬと、藤堂はあらためて思った。

ただ、この銀杏並木づきの工場も、今年実のなるときには、もはや華王紡のものではない。不採算工場として閉鎖、近く売却することになっているからである。それは、ようやく効果を奏しはじめた再建整備計画の最後の仕上げとして行われるはずであった。

その川崎工場は、創業時の工場。各地に工場ができてからも、本社機構は昭和のはじめまで、そこに置かれていた。華王紡の聖地であり、統合の中心でもあるような工場。その記念すべき工場を売るということには、世間の眼もあり、かなりの勇気が必要である。

現地に来て、いざ銀杏の並木道を走ってみると、藤堂にはいっそうその感じが強まった。

川崎工場を手放すことは、華王紡が華王紡でなくなることでないのか。少なくとも、父幸有の息のかかった会社でなくなってしまうのではないか。

過去を清算し、心機一転、多角的なダイヤモンド経営にのり出す。採算上の問題としてだけでなく、その決意のしるしとして売却をきめたのに、きめた自分が足もとからさらわれ、見知らぬ

空へ投げ出されてしまいそうな不吉な予感がした。

「社長」

並木道を見ながら黙りこんだ藤堂に、矢吹が低い声をかけた。

二人は眼を見合せた。

「ぼくの考えていることがわかるのかね」

「推測できる気がします」

藤堂は、うなずいた。

この男には、自分の気持がわかる。わかってくれている。だが、弱音まで読みとられては困る。藤堂は、ひとつ咳せきばら払いしてから言った。

「記念碑とか記念物とかは、心の中にだけ在ればいい。そうだな、矢吹君。経営はセンチメンタルになっては、いかんのだ」

矢吹は、はい、と答えたが、心の中では、当の藤堂も、いくらかセンチメンタルになっていると思った。

いつもは本社工場である厚木で開く役員会を、今回だけその川崎工場でやるときめたのには、重役たちの気分をひきしめる狙いがあり、同時に、幸有社長以来の華王紡の歴史を回想させ、藤堂の権威を再確認させるふくみがあった。それらの狙いが、若い矢吹にしてみれば、つまり感傷であり、感傷といって悪ければ、気分をなせるわざであった――。

社長の腹心といわれ、股肱ここうといわれながら、矢吹は最近では、何彼かにつけて、社長を批判的に

見ているのに気づく。社長との蜜月の時代は去った。

だが、藤堂社長は、そのことに気づいてはいない。矢吹に対してだけは、不用意なほど心を開く。開いて見せる。

へきみは腹心だから、特別だ

と、言わんばかりにして。そうすることで矢吹に恩義を感じさせ、藤堂にしばらくつけようとしている。

それに対して矢吹は、当分は「腹心」の仮面をまとい続けて行こうと思う。それが、自分にとっても、会社にとっても、利益である限りは……。

ベントは、並木道ごと工場の門にのみこまれて行った。

守衛がとび上るようにして敬礼する。藤堂は、軽く目礼を返した。

銀杏並木は、構内へ入っても、なお続いていた。かつては本館と呼ばれた工場事務所に向け、ベントはスピードを落した。

まだ操業を続けてはいるが、構内は静かであった。人影も見ない。藤堂は物足りなさを感じた。二十年ほど前であろうか。終戦後の苦境から華王紡がようやく立ち直ったとき、藤堂は全国の工場行脚を思い立ち、その第一歩として、この川崎工場に来た。

門から本館までの道の両側に、女工たちが人垣をつくって待ち受けていて、藤堂を見ると、いっせいに歓声を上げ、握手を求めて手をさし出してきた。

藤堂はスターとしても十分通用する風采であつたが、同時に、華王紡を立て直し、温情主義経

営を復活した実力者である。女工たちにとっては、スター以上のスターであり、女工たちは藤堂の手を奪い合った。

藤堂は、もみくちやになりながら、握手にこたえた。右手だけでは間に合わず、両手で次々と少女たちのやわらかな手をにぎり、また、にぎりしめられた。

歓声の中で何十回握手したことであろう。しばらくは手がしびれて、ペンがとれないほどであった。

藤堂は、恍惚こうこうと満足を感じた。それは、スターの恍惚よりも、はるかに実のあるものであった。ただの経営者の満足感よりも、もっと激しいものであった。がちり組んだ巨大な人間集団の首長、血縁につながる古代の長だけが感ずることのできた恍惚と満足ともいえた。自分以外の誰がこの倖しあわせを手にすることができたらうと、藤堂は心誇らかに思った。

そのとき女工たちが立ち並んでいたあたりには、いまは雑草が生い茂っていた。この不況時に女工たちを整列させれば、藤堂は工場長を叱りつけたであろうが、それにしても、物足りぬ気持ちに変わりはなかった。

藤堂は、工場長の岩本が専務の島派であることを思い出した。島を委員長とする再建整備委員会の委員でもある。工場長としては、自分の工場の閉鎖に反対するものなのに、進んで閉鎖をきめた男でもある。

ベントがとまると同時に、赤煉瓦の本館からは、当の岩本工場長が走り出てきた。

「みなさん、揃そろわれたかね」

藤堂は、いつものように丁寧な口調で訊いた。

「いえ、三河絹系の相原社長が……」

藤堂は、形の良い眉をくもらせた。

「相原君がまだ来ていない？」

「急な御用で、お見えになれないそうで」

「おかしいな」

声はおだやかだが、藤堂の手は拳こぶしをにぎりしめていた。

相原は、以前、華王紡績の重役の一人で、三河絹系に移り、最近、社長になった男である。

華王紡と三河絹系とは株を持ち合い、華王紡からは、他に重役・技師を派遣、技術を公開して援助してやっている。

ただし、藤堂に心外なのは、三河絹系に出向した男たちが、申し合せたように三河絹系の中へ埋没し、華王紡をふり向こうとしなくなったことである。藤堂は、相原を呼び寄せ、業績報告に合わせて秋明を聞くつもりでいた。

その相原が現われない。不参は、新たな挑戦でもあった。

藤堂の豊かな頬に、血の色がさした。

藤堂は無言で歩き出したが、二、三步進んで立ち止った。夏の木漏れ日に照らされた本館の煉瓦壁の色の鮮やかさが、藤堂の足をとらえた。

煉瓦の壁は、ほの明るい臙脂色えんじいろで、まだ昨日、窯かまから出たばかりのように、つややかであった。

その煉瓦は、八十余年前、ひとつひとつパラフィン紙に包んだ上、イギリスから船で運んできたものといわれる。

この工場の建設された明治十九年当時、日本の紡績設備は、わずか八万鍾。工場の多くが、「二千鍾紡績」と呼ばれる小規模なものばかりで、官営模範工場として政府が育成している工場においてさえ、そうであった。

そこへ、三万鍾の設備を持つこの工場が誕生した。

華王紡関係者はもとより、肩入れした政府や銀行の当局者も、内心、うまく行くかどうか案じながら開業を迎えた。

無責任によるこんだのは、大衆であった。陸蒸氣おかじようき以来の西洋文明の到来だというので、東京・横浜などからの見物人がひきもきらず、「入場料を払うから見せろ」とさわぐ人々もあって、工場側はその応接に困惑した。

いざ操業をはじめると、果して工場は大きすぎて、うまく行かなかった。生産そのものがなかなか軌道にのらず、市場調査などやっていなかったため、できればできたで、買手がない。

赤字につぐ赤字となり、会社は解散一步前に追いやられたが、その危機を救ったのが、藤堂の父幸有であった――。

煉瓦壁は、そうした思い出をたっぷり吸いこんでいる。そこには、一華王紡の夢だけでなく、日本の綿業、日本の資本主義の夢が眠っているともいえた。

華王紡に余力があるなら、そっくりそのまま巨大なドームに入れて、日本資本主義博物館とし

て残しておきたい建物であった。

工場の買手は、歴史にも伝統にも全然無関心な戦後派の流通業者で、ここを壊して一大ショッピング・センターをつくるという。無残である。その無残さが、ふたたび藤堂の胸をとらえた。

工場閉鎖は、藤堂としては本意ではなかった。

度々操短なみなこそしたが、藤堂が社長となって以来、増設や拡張続き。ただの一度も企業規模を縮小することはなかった。温情主義の王国を、自らの手でせばめる気にはならなかった。

このため、今度の不況対策も、島専務に任せて進めさせた。島は、岩本や矢吹らを集めて再建整備委員会をつくり、四大工場の閉鎖・休止、従業員一割、部課長一割五分、役員二割の賃金カットを骨子とした再建案をつくり、役員会にかけた。

藤堂としては、たとえ不採算工場とはいえ、整理には不乗気であったが、人員整理を伴わず、しかも次に来る拡大計画のための地固めになるということから、最終的に了承した。藤堂が「ダイヤモンド計画」と名づけた非繊維部門をふくめた多角経営への進出、その光り輝く発展図のための布石として、今回は眼をつむろう。

「どうかされましたか」

企画室長の矢吹が、背後から言った。藤堂は、また心を読まれたと思った。

だが、不愉快ではなかった。むしろ、そういう心の中の理解者が居るから、救われるとも思った。

藤堂は、矢吹の声に促されるようにして歩き出した。

いまでは映画のセットでしか見られないような廻り階段を上る。何十年も油を吸ったりノリリュムが、光苔ひかりこけのように渋く光っている。

父の幸有の靴音が、すぐ先から聞えてきそう、藤堂は耳をすましたくなった。

銀杏並木からはじまり、工場全体に思い出がこもっている。ここを売るのは、藤堂にしてみれば、手や足を切る思いがする。血を売る思いがする。

その思いが、他の重役にはない。だから、乱暴なほどの整理案をつくることができる。

もっとも藤堂は、いわゆる二代目社長ではなく、オーナー社長でもない。

華王紡は個人企業どころか、戦前の日本では、五指の中に入る大企業であり、藤堂家の保有株数は五パーセント足らずでしかなかった。

藤堂の父は、たのまれて二代目の社長をつとめ、藤堂自身は、戦後、会社の首脳部が追放されたため浮び上って、たまたま五代目の社長になったというのにすぎない。

その点では、サラリーマン社長とたいして異ならないのだが、ただ意識において藤堂は、強烈に会社と一心同体になっていた。

他の会社の役員を兼ねることもない。ゴルフもやらず、夜のつき合いも、ほとんどない。わき目もふらず、社長業ととり組んだ。財界へ出れば、十分にタレントとして通用するのに、会社の外へは絶えて顔を向けなかった。

藤堂にしてみれば、自分ほど会社に打ちこんでいる人間が、他に居るとは思えなかった。そして、そこから生れた權威こそ本物であり、藤堂は、ときには容赦なく重役たちのクビを切り、経